

新

TRAVEL MAGAZINE SHIKOKU

特別増刊号

えひめ町並博2004  
ガイドブック

Supported by

愛媛県町並博2004  
実行委員会

JR四国

500YEN SPC出版

# 四国旅マガジン Gaja

読む、感じる、旅をする [www.kk-spc.co.jp/gaja/](http://www.kk-spc.co.jp/gaja/)

[雑誌]

## 狂言師・ 野村萬齋インタビュー

～内子座・上芳我邸にて～

聞き手=えひめ町並博2004プロデューサー・宮本倫明

## 南の時景色

—「時」が作りだした南予の風景—

野村・四国カルスト、宇和島・闘牛、五十崎・大嵐合戦、宇和島・  
遊子水ヶ浦の段畑、内海・真珠筏、吉田・みかんの神様、五十崎・  
亀岡酒造、長浜・長浜大橋、内子・大森和ろうそくなど

## がいな南予びと

～泊まる・食べる・遊ぶ もてなしの達人たち～

泊まる：松野・森の国ホテル、肱川・小藪温泉

食べる：大洲・草人庵、内子・道の駅からり

遊ぶ：伊方・無人島体験、肱川・大谷の文案 など

大洲・内子・宇和

# 南予町並物語

えひめ町並博2004全イベントカレンダー収録

内子座舞台上立つ野村萬齋氏



愛媛県南予地域観光振興イベント

えひめ町並博

2004



宮本倫明  
Michiaki Miyamoto

1960年3月13日山口県生まれ。1984年大阪大学を卒業後、(株)リクルート、(株)カントリーを経て、1993年(有)メディアマーケットを設立。'89海と島の博覧会ひろしまサブプロデューサー、第1回ジャパンエキスポ富山'92プロデューサー、'97食博覧会・大阪基本計画プロデューサー、うつくしま未来博2001総合プロデューサーなどの経験を持つ。

宮本／今、ぶらりと内子の町を見られたわけですが、どのような印象をお持ちになりましたか。  
野村／まだ、一部しか見ておりませんが、こういう古い町並みが残っているというのは素晴らしいことだと思います。最近はどこに行きましても、無個性な町が多いですから。それと単に古いものが残っているだけではなく、非常に生活感がある。その点に強く惹かれました。まあ、僕はこういう建物を(上芳我邸)を見て、久々に横溝正史の世界を思い出しました(笑)。宮本／確かに、明治・大正の世界ですよね。ただ、ここ(内子町)に限らず、日本各地には非常にいい歴史や文化があるんですが、往々にして生活と隔離してしまいがちなんです。でもこの内子をはじめ

上芳我邸を見て  
横溝正史の世界を  
思い出しました

愛媛県の西南部——南予地方——は、古き佳き物の中で普通に人が住んでいるんです。「まちなみ」と「いとなみ」が同居しているというか……。その点を多くの方に知って欲しいな、と。一方では、住む人の意識を高めて欲しいという想いも抱えていますね。萬齋さんにもお力を借りるわけなんです。この「えひめ町並博2004」がその契機になればと考えています。ところで、9月3・4日に開催される狂言公演の舞台である内子座には、どのような印象を持たれたんでしょうか。  
野村／そうですね。古いということだけでは、もっと古い芝居小屋を見たことがありますが、内子座は古いけれど多少現代的にアレンジしてあり、古い建物にありがちな危うさがなくて安心できますね。それと芝居小屋があるということ、ここに昔、人が集まったということですかね。どんな人たちが集まったのか、と。そんなことを考えました。「本家席」には地元の実力者たちがいたんでしょうが、普通の升席にはどんな人たちがいて、二

内子座は  
観客との一体感が  
出やすいですね

宮本／萬齋さんは、かなりたくさんさんの劇場で演じていらっしゃるんじゃないですか。「オイディプス王」をやるアテネの古代劇場「ヘロデス・アティコス」なんて、なかなか立てる場所じゃないでしょう。  
野村／そうかもしれませんね。  
宮本／そういういろんな劇場で演じた



野村萬齋  
Mansai Nomura

1966年4月5日、狂言師・野村万作の長男として東京に生まれる。祖父故六世野村万蔵及び父に師事し、3歳で初舞台を踏む。東京芸術大学音楽学部卒業。『狂言ござる乃座』主宰。国内外での狂言公演に参加する一方、シェイクスピア劇・ギリシャ悲劇や映画に主演するなど幅広く活躍している。世田谷パブリックシアター芸術監督も務める。



Special Talk

野村萬齋

◆狂言師

宮本倫明

◆えひめ町並博2004プロデューサー

「えひめ町並博2004」の多彩な企画の中で、最も注目を集めているのが、狂言師・野村萬齋氏も出演する“内子座芸能撰集「内子座特別公演」”。公演に先駆けて、舞台となる内子座を訪れた野村氏に劇場や内子の町並み、そして南予や四国に対する印象をうかがった。聞き手は「えひめ町並博2004」プロデューサー宮本倫明。

Special Talk  
野村萬齋 ◆ 宮本倫明

※1：内子座一の商家・芳我邸の分家。漆喰壁の風格ある建物で、現在は木造資料館となっている。明治27年建築。  
※2：舞台から見て左手にある観覧席。舞台と同じ程度の高さがあり、内子座株主などの優待席として使用。

古典芸能といえども、別に既製品ではない。

その場の活きた空気に反応していくものなのです

野村萬齋



◆木版資料館上芳我邸にて

町並博のやり方も同じ。

パッケージものを押し付けるのではなく

住んでいる方の動機が大切です

宮本倫明

いう意味では、もう劇場評論家になれるんじゃないですか。劇場の持っている雰囲気をも感じていらっしゃるでしょうから。野村／その点からいえば、内子座のようなところは観客との一体感が出やすいですね。花道から役者が出てくると「役者が自分たちの中にいる」という感じがするでしょう。お客様も自分たちが劇場の一部になっているんだ、という気になるんです。相乗効果が非常に生まれやすい場、ライブハウスのといいますか。宮本／役者さんの側からすれば、客席の反応や呼吸が感じられるんでしょうね。これはやりやすいものなんですか。野村／そうですね。お客様に合わせて演じ方も変わってきますよ。古典芸能といえども、別に既製品をやっているわけではなく、その場の活きた空気に反応していくものなんです。だから、現代人が観れば、現代のお芝居として感じられるのではないのでしょうか。

宮本／そういう意味では、町並博のやり方も同じ。パッケージものを押し付けるのではなく、住んでる人たちから何か面白いアイデアが出てくるまで僕たちと話し合ってますね。この南予地域で60回ぐらいミーティングとか座談会をしてるんですが、話し合いの中から住んでる方の想いや動機を引き出していきます。野村／なるほど。そうすると町並博の後も、住民の方が自主的にイベントなり事業なりができるようになりますね。宮本／まさに、それが最大のねらい。従来のイベントは期間が満了になったら「はい、おしまい」という形でしたが、それは嫌だ

つたんです。

野村／「嵐の後の静けさ」にならないようにするわけですね(笑)。

宮本／内子座の公演も、二本一本の演目を大事に作っていきたくて思っています。そして、そういうシステムを地元の人に根付かせたいということで、様々なグループを作ってるんですよ。劇場を中心として継続できる仕組みができれば...

野村／海外の場合、演劇フェスティバル、音楽フェスティバルなど、フェスティバルがいろいろなところに存在してしまっていて、そのためには、やっぱり一つの循環作用というか、地元の方が張り切らないと駄目ですね。お仕着せでやってしまうと、そのまま終わってしまいます。

少し、話が変わるかもしれませんが、富山県利賀村のフェスティバルに参加したことがあるのですが、最初に行った時には宿なんかありませんで、民家に泊まったんですよ。最初は「え？」と思いましたが、それはそれで楽しい経験ができました。普段、出来ない体験ができるのが面白いですね。その時に施設や設備よりも、大切なものがあるということをつくづくと感じました。

社会還元的な発信の仕方も、地元の人に対しては大切なことです

宮本／劇場を活かすためには、何が一番ポイントとなるんでしょうね。野村／発信する力を持っているかどうか、



◆八日市・護国の町並みにて

今回対談をしてくださった野村萬斎氏をはじめ、今最も旬なアーティストたちが出演する「内子座芸能撰集「内子座特別公演」」の詳細については143ページへ。

◆萬斎さんのサイン色紙を1名様にプレゼント。  
 官製ハガキに郵便番号・住所・氏名・年齢・電話番号を記入の上、〒790-8586 愛媛県松山市湊町7丁目3-5 (株)エス・ピー・シー 四国旅マガジンGajA編集部「野村萬斎サインプレゼント」係 までご応募ください。応募締切は2004年12月31日(当日消印有効)。  
 「よろこびありや」さんばそう  
 能楽の儀礼曲「翁」の中の、狂言パート「三番望」での有名なセリフ。

野村／いつの時代にも絶対に芯になることを子どもには伝えたい。僕もそれを習ってきたわけですが、今やっていることは、父から習ったことに自分の感性なり、時代感覚との順応性なりが加味されていると思うんです。  
 宮本／自分の子どもに伝えるものがあるというのは、大事なことですな。

徳島県脇町では「うだつが上がるぬ」の語源を直に見ました

構えられているんですか。  
 野村／ええ。あちこちに。でも地図を見ないで、四国のどこに行つたというのなかなか覚えていませんが。  
 宮本／四国で印象に残っている場所ってありますか。  
 野村／場所では徳島県脇町。うだつの町並みで「うだつが上がるぬ」というのはここから来たんだというのを直に見ました。それからうちの祖父(人間国宝・故六世野村万蔵)が香川の銘菓「かまど」というお菓子屋さんのコマージュに出たの縁かどうかが、経緯は覚えていませんが僕

が7、8歳の頃、徳島だったと思うんですが、三木武夫元首相(故人)に頭を撫でて頂いたのを覚えています。確か三木さんは徳島のご出身でしたよね。えらい昔の話ですけど、もう30年くらい前です。  
 宮本／四国にはどのようなイメージをお持ちでしょうか。  
 野村／一概には言えませんが、ごんまりとして、素朴な感じがしますね。のんびりとした感じでしょうか。私たち東日本の人間にとっては、非常に新鮮な感動がある地域です。これからの縁があれば、どんどん足を運びたいですね。  
 宮本／お待ちしています。今日はありがとうございました。



◆上方我部の中庭を望む

でしょうね。そこに劇場があるということだけですと、オープンした当時は珍しかった人が来て、やっぱり発信性がなければ、そのまま忘れ去られてしまいますからね。常に発信性を持つということ。でもその発信性というのは、別に芸術的な高さを伴わなくてもいい。社会還元的な発信の仕方というのも、地元の方にとってはものすごく大切なことです。外部の人間にとっては、ある程度打ち上げ花火も必要なのですが、地元の間人にとっては、共益的なことも含めて生活の方に得られる

もちろん技術志向でいうと、僕らの世界なんかだと若いうちにね、した方がいいんですが——そういう「保存」という形でしたら余裕を持っている人のほうがいいかもしれませんね。  
 宮本／町並みにしても文化にしても、無理をしないで次世代に伝えていく方法ってあるんでしょうか。  
 野村／そうですね、他を真似する必要はないと思うんです。真似するとお仕着せになつてしまふと思うんです。まずは自分たちの良さをどう理解するか、その

何かが必要でしょう。  
 宮本／内子座では今、文楽をテーマにした活動を継続中なんです。この地方には人形芝居、浄瑠璃が残っているんですが、どこも後継者づくりが課題となつています。そこで、思い切つて後継者を外から呼ぼうと挑戦している地区もありです。さらに若い人という発想は、むしろ、会社をリタイアした人で、文化的なことに興味がある人にも来てもらおうか、と。そうして集まった方に、文楽の公演に出てもらうと考えているんです。  
 野村／必ずしも若者だけを、ということはないんですね。ある程度お仕事をした人は、いろんな意味で余裕と経験があつて——



◆内子座正面入口

良さをどう表現していくかということが大切な気がしますね。  
 僕も、海外に留学してから随分と眼を開いたというか、狂言を内側からだけでなく、外から見ることができました。そして、自分の個性、狂言の個性を知って、これは他にはない素晴らしいものだ、と再確認し、アイデンティティを見出すことができたんです。それをぜひ、伝えたいと思うようになりました。そして伝える時には、他のジャンルで似たようなことをアピールするためにどういう手を使っているのかを学びました。それは二種のテクニックで、そういうのを大いに利用するのはいいことだと思えます。  
 宮本／狂言に対しては、どういう風に残していこうと考えていますか。

野村萬斎 ◆ 宮本倫明

※3：脇川町「大谷文楽後継者育成プロジェクト」は86ページで紹介。